

2019年度 第3回 ランチタイムフリートーク 報告書

1. 主 催 外国語学部
2. 講 師 名 木村 護郎クリストフ 教授 (外国語学部ドイツ語学科)
3. 日 時 2019年6月25日(火) 12時45分~13時20分
4. 場 所 2-915 (英語学科会議室)
5. 出 席 者 21名
(出席者詳細は別紙)

6. 内 容

留学生と共に学ぶ一日独共学ゼミにおける言語管理から一

ドイツ語学科の授業では、在外履修プログラムの一環として、ドイツからの留学生を受け入れている。そして文化的背景が異なる学生が相互に助け合って共に学びあう場を創出することをめざしている。その際に、問題となるのが使用言語である。日本語を学ぶドイツからの学生と、ドイツ語を学ぶ日本の学生はどちらも相手言語の使用能力に限界があり、その限界をのりこえる方法が課題となっている。日独比較科目では、「やさしい日本語 (leichte Sprache)」をお互いのコミュニケーションツールとしている。これによって、習得する言語のスキル向上、授業内容の更なる理解を図っている。また、「やさしい日本語」を使うことは、分かりやすい表現を使用する能力を養うきっかけにもなる。

こうした授業の実践を通じて、仲介能力(mediation)を身につけることを目標としている。仲介能力とは、何らかの理由で直接の対話能力を持たないもの同士の間のコミュニケーションを可能にするものである。外国人が増加しつつある日本において、こうした能力は実社会においても重要性を増すであろう。

【フリートーク】

A 先生：文化や国民性の重要な表われでもある身振りなどの視覚的なコミュニケーション手段については、どのようにお考えでしょうか。

→プレゼンの際など視覚的資料を使うようにと学生に指導をしていますが、身振りについ

ては授業で扱っていません。身振りについては今後考えていきたいと思います。

B先生：日本人とドイツ人が似ていると聞いたことがあるのですが、授業の中でそのようなことを感じることはありますか。

→どちらかと言えば、日本人とドイツ人の違いを感じる人が多いです。ドイツの学生のほうが議論に抵抗感がないので、ドイツ人の学生が一方向的に話すといったような状況が生まれることがあります。議論を促すためには、想定される質問などを予め考えるなど、お膳立てをする必要性があります。

C先生：私のゼミにもドイツからの留学生がいます。木村先生のおっしゃるように、その学生が議論の場を牛耳ってしまうことがあります。しかし、そうした留学生の積極的な態度を見ること自体が、日本の学生にとって異文化体験として学びの1つになっているようです。→ドイツではデモに参加したりして社会に積極的に働きかける学生が多いです。実際にそうしたドイツの学生と交流することは、日本の学生にとって貴重な体験になっていると思います。

D先生：私も日本人と留学生との違いに驚くことがあります。授業のなかでドイツからの留学生にからかわれることがありました。日本でそのようなユーモラスな経験をしたことはなかったので、とても新鮮でした。

C先生：評価方法についてはどのようにお考えでしょうか。また実際どのように成績をつけていますか。

→試行錯誤しています。一応、外国語科目ではなく日独比較科目となっているので、言語を問わず授業への積極的な参加をまず評価の対象としています。あとは、ゼミ論も評価の対象になります。

C先生：大学で外国語を学ぶことと、実社会で外国語を使うことは大きく異なると思うのですが、そのギャップについてどう思われますか。

→ある卒業生が教えてくれたのですが、日本の会社は、重要でない社内の議事録などでも、細かい言葉遣いまで正確さをもとめるそうです。そうした日本の状況を鑑みるなら、ゼミに出席している学生の外国語能力では不十分といえますが、本来は、いつもそこまで細かい表現にこだわる必要があるのかどうか問い直すべきでしょう。今後、職場の多様性が増すことで、会社ももっと柔軟になっていくのではないのでしょうか。

E先生：ゼミに留学生が参加する合同のゼミを行うことで、学問的なレベルを下げることはつながりませんか。あるいは、レベルの低下を何らかの方法で補えるのでしょうか。

→確かにレベルは下げざるを得ません。一つの方法として、日本の学生とドイツの学生で違うものを読ませて、授業の内容を補うというものがあります。ただし、課題に取り組まない学生もいるので、真面目な学生とそうでない学生との間で差が開くという結果になりました。ゼミ論に関しては、学生をフォローして最終的なレベルが落ちないようにしています。確かにゼミのなかで扱うことができる内容の広さや深さは狭まったのですが、その代りとして仲介能力を養うことも学習目標としています。学習の重点が移ったのだと言えます。

E先生：こうしたゼミを行う上で、教員の役割についてどのようにお考えですか。

→究極の仲介者(mediator)であると思います。ただし、実際にはただの通訳者にならざるを得なかったりするなど、課題は多いです。

C先生：グループ分けはどのようにしていますか。例えばレベルを考慮したりしているのでしょうか。

→学期の前半は、まだ具体的なテーマに入っていないので、毎回ランダムにグループ分けをしました。学期の後半からは具体的なテーマに入るので、グループ分けの方法については考えていきたいと思います。

【司会：B先生のコメント】

異なる言語能力を有する学生を対象にしたクラスでは、教員にとって使用言語は問題である。その言語能力の差を妨げとしてとらえるのではなく、言語能力の一つとしての「仲介能力」を育成する好機であることについて話しして下さった。具体的には、日本語を学ぶドイツの学生とドイツ語を学ぶ日本の学生の合同ゼミでの活動の紹介を通じて、学生の「仲介能力」を育成する方法を紹介して下さった。その一つとして「やさしい日本語」の取り組みがあり、木村先生のゼミでは、ゼミ独自の「やさしい日本語」と一般社会に向けた「やさしい日本語」の指導が行われている。言語能力を身につけさせるだけでなく、学生が社会で役立てることができるように言語教育を行うことの重要性について改めて考える良い機会となった。

以 上